

佐敷花園城Ⅳ

— 一番代屋敷跡南側・南西部堀切発掘調査概報 —



肥後国絵図部分 佐敷周辺

1998年

芦北町教育委員会

目 次

発 刊 の 言 葉	2
1. 平成9年度発掘調査	
(1) 平成9年度の調査目的	3
(2) 調査の経過と成果	
(イ) 登城口推定地Ⅰ（芦北町立社会教育センター裏）	5
(ロ) 登城口推定地Ⅱ（二尊寺周辺）	8
(ハ) 南西部堀切部分	10
2. 文献・絵図の調査	13
3. 出土遺物について	14
4. ま と め	16
5. 調 査 体 制	17
6. あ と が き	18

《例 言》

1. 本書は、芦北町の城山公園内、文化財埋蔵地に埋蔵された文化財の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は芦北町教育委員会において「佐敷城跡発掘調査団」を結成し、平成9年7月16日～平成10年3月31日にわたって実施した。
3. 調査における測量・実測・写真撮影は、芦北町教育委員会 長崎・深川が担当した。
4. 出土物の整理は、芦北町文化財収蔵庫で行い、その他の事務は教育委員会で行った。
5. 本書の執筆は深川が行い、挿図・写真は教育委員会が作成した。
6. 本書の執筆・編集は、佐藤教授の指導を受け、教育委員会が行った。

発 刊 の 言 葉

平成5年3月より始めました佐敷花岡城の発掘調査ですが、本年も引き続き調査が行われまして、その調査内容を『佐敷花岡城Ⅳ～番代屋敷跡南側・南西部堀切跡発掘調査概報』として発刊する運びとなり、大変嬉しく思います。

本年度の調査は登城口と南側境界の確定を調査目的として進められました。城下町との接点である登城口推定地部分の調査では、登城口自体の確認はできませんでしたが、道路下より思いがけなく石垣が発見され、城下町との関係を知る上で今後の調査が期待されます。また堀切跡の調査では堀底が平坦なU字型の堀であったことが判明しました。このように一つ一つの調査を確実に行っていくことが、佐敷花岡城の全容を解明するのには不可欠である、との思いを改めて感じております。

さて3月には佐敷花岡城は県指定史跡に、また城跡から出土しました「天下泰平」銘鬼瓦、および桐紋鬼瓦が県指定の重要文化財の指定を受けました。更に本年度をもちまして保存整備事業が一応の終了を迎えます。これまでの関係各位のご尽力に深く感謝いたします。

本書の発刊により、広く皆様方に佐敷花岡城へのご理解を深めていただくよう努力していきたいと考えております。今後とも文化財行政全般に対するご理解とご協力をいただきますよう、心からお願い申し上げます。

最後になりましたが、調査に対して直接ご指導・ご助言をいただいています佐藤先生、県文化課、佐敷城跡保存整備検討委員の方々をはじめ、貴重なご指導・ご助言をいただきました全ての方々に対し、心からの感謝を申し上げ、概報Ⅳの発刊の言葉と致します。

芦北町教育委員会

教育長 大 石 正 雄

1. 平成9年度発掘調査

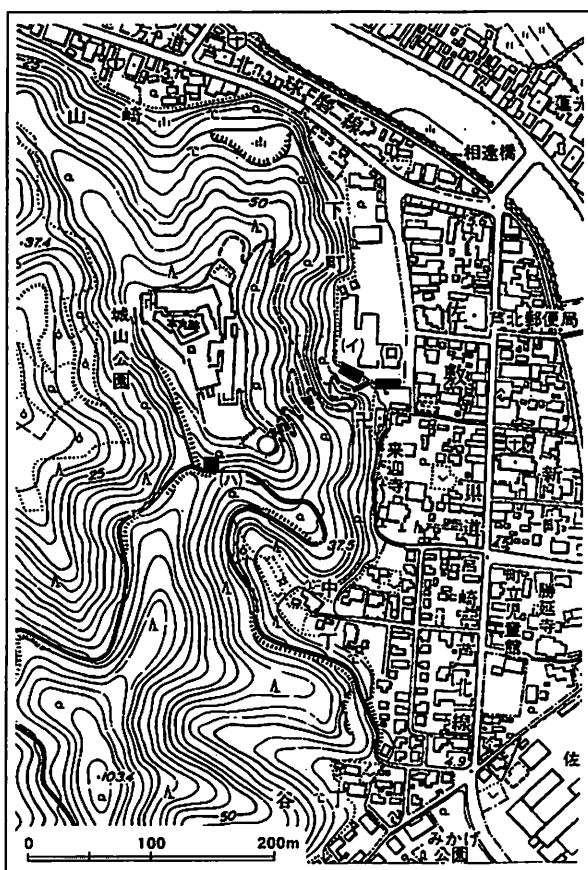
(1) 平成9年度の調査目的

今年度は登城口の所在地を確定することと、南西部堀切推定地の土層を確認し、堀の断面形を明らかにすることを主な目的として調査に入った。

登城口については、前年度までの発掘調査によって確認された城門の位置、及び明和9（1772）年に森本一瑞が著した『肥後国志略』の付図である「芦北郡佐敷之図」（『佐敷花岡城Ⅱ』参照）などの絵図資料により、芦北町立社会教育センター（旧佐敷番代屋敷跡）付近の山手周辺が推定地とされた。その確認調査のためのトレンチを社会教育センター裏及び隣接する二尊寺境内の2ヶ所に設定した。

城域の南西部の堀切推定地には南北にトレンチを入れ、堀切の形態についての確認調査を行った。

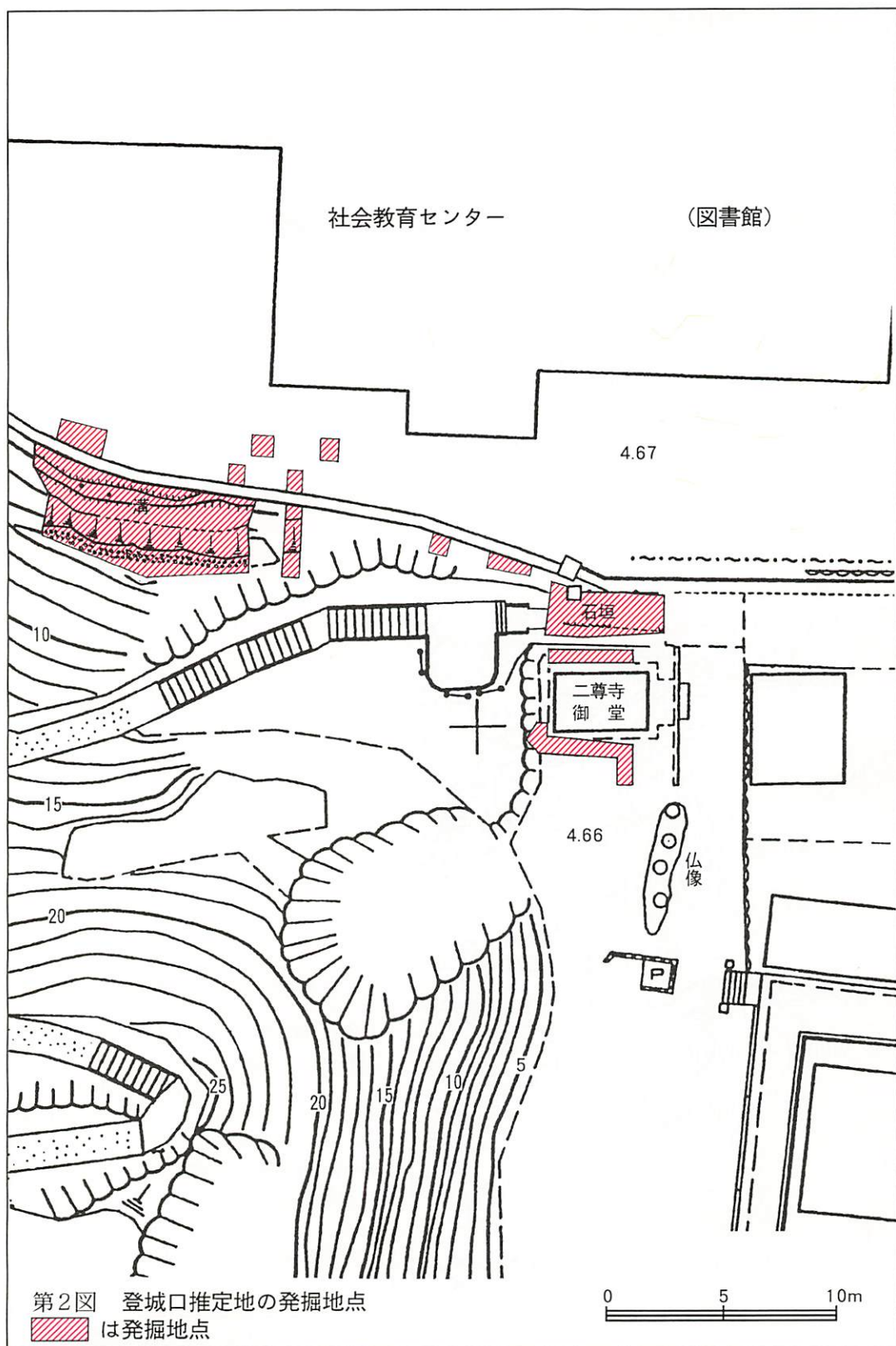
調査地点については第1図、調査期間は第1表のとおりである。



第1図

調査地点名	調査期間
(イ)登城口推定地Ⅰ 〔社教センター裏〕	平成9年7月16日 ～10月13日 平成10年12月12日 ～3月31日
(ロ)登城口推定地Ⅱ 〔二尊寺周辺〕	平成9年10月27日 ～11月11日
(ハ)南西部堀切	平成9年10月17日 ～平成10年2月27日

表1 調査地点と調査期日



(イ) 登城口推定部Ⅰ～社会教育センター裏

今までの調査で社教センターの南西に登城口を推定した。その主な根拠は、社教センターの南から山上へ向かう道路が、明治8年ごろに作られた地籍図に表現されているからである。

社会教育センター（以下、社教センター）一帯は、細川藩政時代に佐敷番代の屋敷が置かれており、加藤氏時代も何らかの施設が存在した可能性が考えられる。そこで社教センター裏の敷地と、城山公園に通じる園路の真下で山の斜面が平坦になっている一部分を調査地点と位置付けた。しかし調査地点付近は佐敷番代屋敷の後、明治から昭和期にかけて学校、郡役所の敷地として使用され（表2）、その後社教センターが建設されるなどの改変が加えられており、作業は困難が予想された。

調査地点はゴミ捨て場と化しており、鉄クズ・ガラス瓶などを除去しつつ、山側斜面にトレンチを岩盤が露出している部分まで延ばし人力で掘り下げていった。土層は岩盤まで著しく攪乱が見られ、遺物も明治以降の瓦やガラス片などがほとんどであった。それでも江戸時代と考えられる九曜紋入り軒丸瓦や少数の陶磁器片もあった。また現在の排水溝を挟んで、社教センター敷地内までトレンチを延長して掘り下げてみたが、こちらも岩盤まで攪乱していた。社教センター建設工事の影響によるものと考えられる。

山側斜面のトレンチ底の岩盤から、現在使われている排水溝の山側に人為的な掘削による溝があることが確認された。そこで山肌に沿って土砂を除去し、岩盤に切り込まれた溝を露出させていった。溝は深さ60cm、幅80cmで途中には河原石が並んでいる。しかし佐敷小学校時代、或いは郡役所のものと思われる瓦も出土しており、河原石は山側斜面上にも積み上げられていて、溝部分の石は、それが落下したと考えられる。第2次世界大戦中に作られた防空壕に関するものであろうか。河原石を取り除くと、その下は砂泥質の灰色土で赤茶色の鉄分が混ざり、灰色土の下は赤茶色の鉄分を多量に含む茶褐色土が、岩盤まで堆積している。河原石の下層部分からは遺物は見つからない。山からの排水を集めて流す水路のように思われる。

現在の排水溝と発掘された溝との間の岩盤に柱穴があるのが見つかった。柱穴は径20cmの円形で、深さは20cmほどである。溝に沿って合計4つの柱穴が見つかっていて、岩盤の崩壊・剥離などで変形はあるものの、径20cmの円形でほぼ一定している。埋土は単層で出土遺物は無かった。溝に沿う柵列と考えられる。



溝の完掘の状況



溝の土層



溝及び岩盤の柱穴

年 号	使用状況	主なできごと	建物・瓦の形態
明治2(1659)年 ?	御茶屋・御蔵 (佐敷番代屋敷)		木造、瓦葺き
明治8(1875)年	公立佐敷小学校	偉集場(演武場)を解体・移築校舎とし、更に一棟を増築。	木造、瓦葺き?
“ 9(1876)年		校舎一棟焼失、佐敷会所倉庫を解体し、移築。	
“ 11(1878)年		火災で校舎焼失?(能勢政元日記に記録されており、明治9年の火事はこれが誤って伝えられたものか)	
“ 20(1887)年	佐敷尋常小学校	明治19年の小学校令により、機構改革。	木造2階建て瓦葺き?2棟
“ 28(1895)年	葦北郡役所	八代葦北郡から葦北郡が分離し、葦北郡役所が設置される。	“ 校長住宅 “ 1棟 木造2階建て瓦葺き 1棟 “ 平屋建て “ 1棟
大正15(1926)年 昭和2(1935)年	組合立葦北実科 高等女学校	葦北郡役所、廃庁。 葦北実科高等女学校が創設される。	郡役所の建物を校舎として使用する。
“ 10(1935)年		葦北実科高等女学校の校舎が新築される。	木造2階建ての洋風建築1棟屋根は瓦葺き。 平屋建ての建物はそのまま利用される。
“ 23(1948)年		葦北実科高等女学校が葦北農林学校と合併し、芦北農林高等学校となり、移転。	
“ 26(1951)年	佐敷町役場	佐敷町役場が向町より移転。	
“ 27(1952)年	熊本県芦北郡 地方事務所	この年、倒壊した地方事務所建物を佐敷町役場が修築・移転	
“ 28(1953)年	熊本県 芦北事務所	その後に地方事務所が入所。 名称を改称する。	
“ 49(1974)年		熊本県芦北事務所総合庁舎が、大字芦北に新築され移転する。	昭和40年には平屋建ての建物の屋根はスレート葺き
“ 52(1977)年	芦北町立 社会教育センター	芦北町立社会教育センターが建設され、現在に至る。	鉄筋コンクリート2階建て屋根瓦無し

表2 現社教センター敷地の使用の歴史

(n) 登城口推定部Ⅱ～二尊寺周辺

城山公園の遊歩道入口南の脇に、曹洞宗古城山二尊寺がある。現在、本堂は倒壊し、住職はいない。信徒が建立した御堂と石仏、鐘撞堂などが存在する。地形からここに登城口を考えることができたので、信徒の方のご理解を得て境内の一部にトレンチを設定し、調査した。

御堂の裏に岩盤が見えたので、それを露出するとともに御堂の南側にトレンチ A を入れた。表土を取り除くと深さ 20cm ほどで岩盤に達した。遺物は若干の陶磁器片が、ビニール袋などと共に出土しただけである。

次に御堂の北側にトレンチ B を入れたところ、1m70cm 下でようやく地山が検出された。遺構は確認されなかったが、遺物は陶磁器片・土師器片が出土している。またトレンチの東端、深さ 20cm ほどに甕が口を上にして見つかった。表土から掘り込まれており、二尊寺で埋めて使用されたものと考えられる。

トレンチ A と B で地山を比較すると、深さに著しい差があることが分かった。そこで確認の意味も込めて、トレンチ B の北側、城山公園遊歩道入口前の町道の一部を調査した。バックフォードでコンクリートを剥ぎ取った後、人力で掘り下げていくと、歩道工事で乱された土の下から石垣が検出された。石垣は山側から城下町方向へ断続的に続き、長さは 5m70cm まで確認できた。最も残りが良い所は、石が 3 段積まれていて 1m 程度の高さである。石材は、粗割石や石灰岩の自然石などが使われていて、築城の早い段階に作られたように思われる。石垣の南から御堂の下にかけて、堀があるように思われる。この部分の土層は、上部に大小の礫が混在しており、人為的に埋められたようである。下部は粒子が一定し、埋まった土と考えられる。石垣付近からは陶磁器片・土師器片・るつぼ・砥石の一部などが出土した。



二尊寺境内に設定したトレンチ A



出土石垣（城山側から）



出土石垣（本町側から）

(ハ) 南西部堀切部分

城山の西南部、テレビ塔のある丘陵との接点部分は、町道テレビ塔線と城山公園遊歩道との分岐点となっている。この部分は尾根の左右に谷が迫る、いわゆる馬の背状地形となっていて、堀切の存在が指摘されていた。

城山側緩斜面に南北にトレンチを入れ、遺構の存在や土層の状態を観察した。斜面の上部は戦時中から戦後にかけて畑として利用されたとの事で、石積みが見られる。トレンチの上も、畑に関連するものと考えられる礫の堆積があった。礫を取り除き表土を剥ぐと、20cmほどで地山に達したが、地山面には遺構は確認されなかった。遺物は瓦片が表土中より採集され、その出土状態から三の丸からの落下と考えられる。

地山を追いながら、道路建設による削り落とし部分までトレンチを延長した。地山はこの部分で急激に落ち込み、堀切であることが判明した。底部はやや西側に緩く傾斜を取っているが、ほぼ平面を保っている。さらに道路の一部を剥ぎ取り、堀の底の続きを露出した。しかし道路工事の際にかなり改変を受けたようで、遺構は確認できず、遺物も乱れた土の中から若干の瓦片が出てきただけである。

堀切の南側はすでに削平されていて、堀の底の幅が確認できただけである。堀の底面の幅はおよそ4m50cmである。



堀切部 発掘前の状況（西側から）



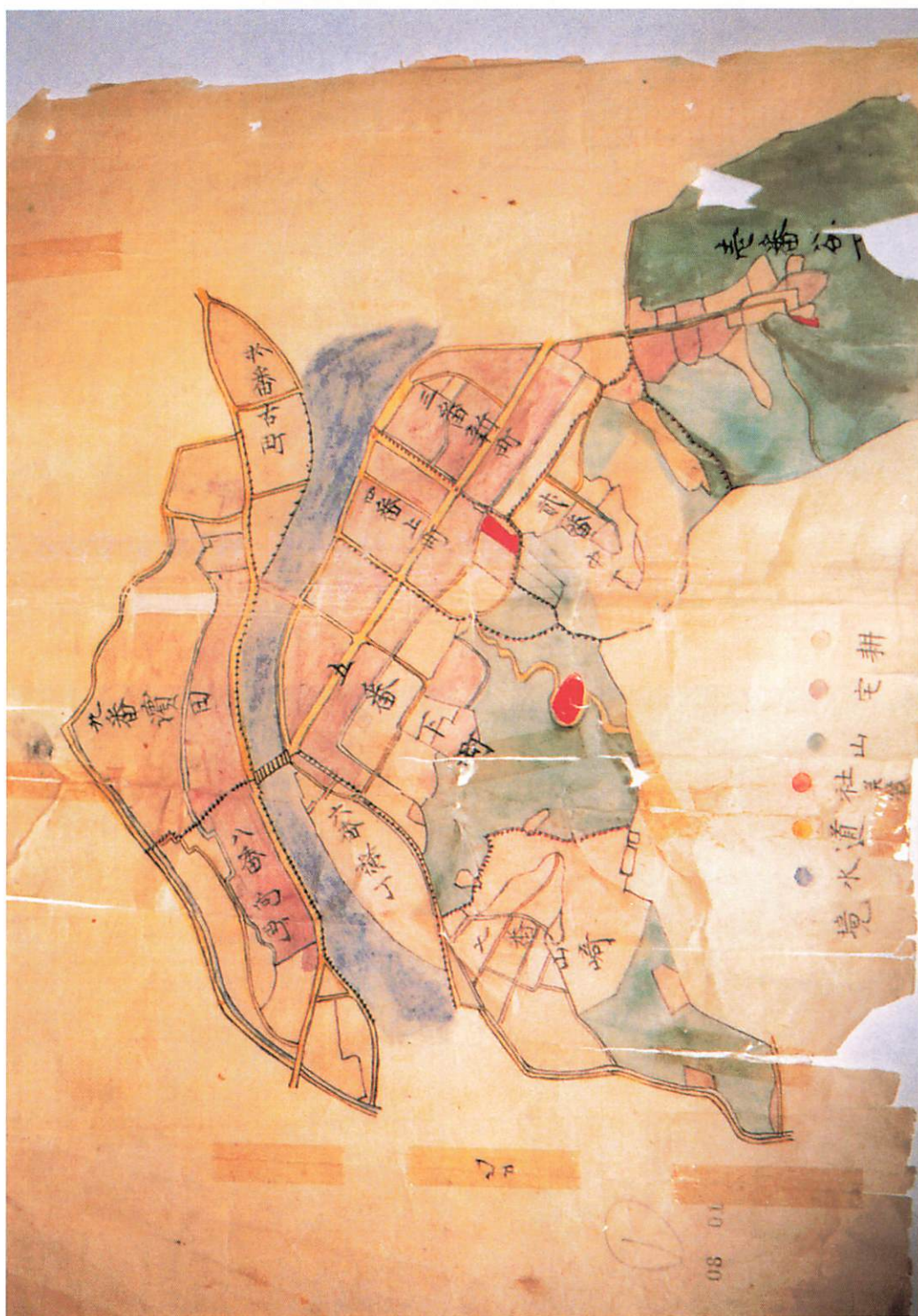
堀切部 完掘の状況



堀切部
山側斜面トレンチの土層（西側）



堀切部
山側斜面トレンチの土層（東側）



第3図 明治8年ごろの作成と推定されている佐敷町地籍図（番代屋敷跡の南西に水路が表現されている）

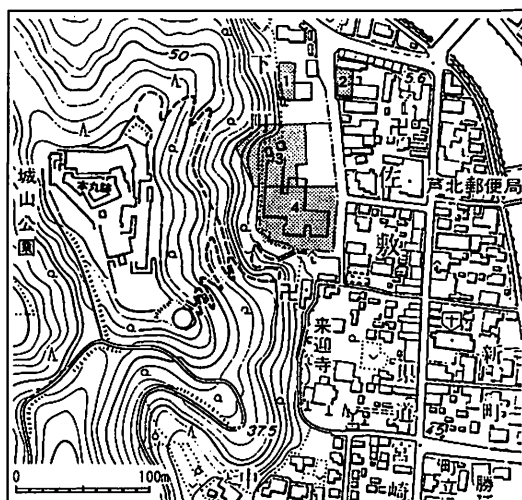
2. 文献・絵図の調査

今回は法務局に所蔵されている地籍図を中心に調査した。この地籍図は明治8年ごろに作成されたもので、宅地・耕地・山林・道路・水路・神社や墓地などが色分けされていて、建物の位置をおおよそ推測できる。

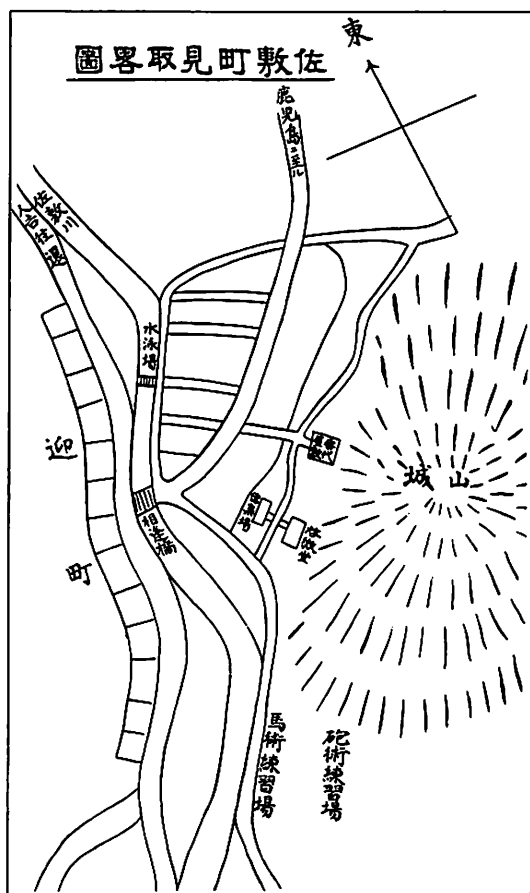
城跡の東側の山裾を見ると、建物が2グループ表現されている。そこは現在の社教センターで、江戸時代の『芦北郡佐敷之図』に「御番頭」と書かれている一区画にあたる。『肥後国誌』にある記述「佐敷御茶屋 番代此内ニ住居ス」、「御蔵 御茶屋内ニアリ」を考慮に入ると、この2グループの建物は御茶屋と御蔵にあたると推測できる。

また大正12年3月に発行された『稿本 肥後文教史』に掲載されている図には、江戸時代の文武稽古所である啓微堂・偉集場と番代屋敷の位置が描かれている。

これらを現在の地図上に示したのが第4図である。今後、発掘調査を進める上で参考になると思う。(佐藤伸二)



第4図 江戸時代の建物の推定位置
①啓微堂 ②偉集場 ③御茶屋 ④御蔵



第5図 佐敷町見取略図
(『稿本 肥後文教史』による)

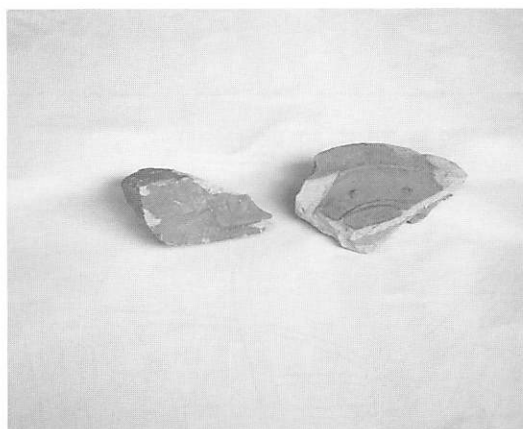
3. 出土遺物について

今年度は調査地点が各種工事の影響を受けていたため、遺物も明治以降のものが数多く混入していた。現在整理作業が終了していないので、江戸時代と思われるものの一部を調査地点ごとに紹介する。

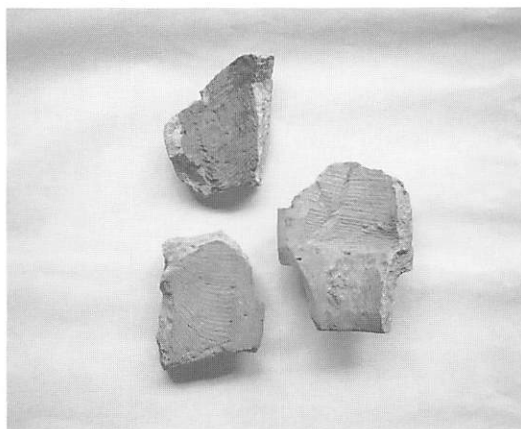
南西部堀切推定地からは瓦片が159点採集された。内訳は軒丸瓦1点、軒平瓦1点、丸瓦27点、その他である。軒丸瓦は巴紋、軒平瓦は唐草紋である。丸瓦に残るコビキ痕はA・Bの2種類である。

登城口推定地Ⅰ（社教センター裏）からは九曜紋入軒丸瓦が見つかった。瓦当径は8.8cm、周縁幅1.1cm、文様区径6.5cm、中心曜径2.1cm、瓦当厚1.5cmである。

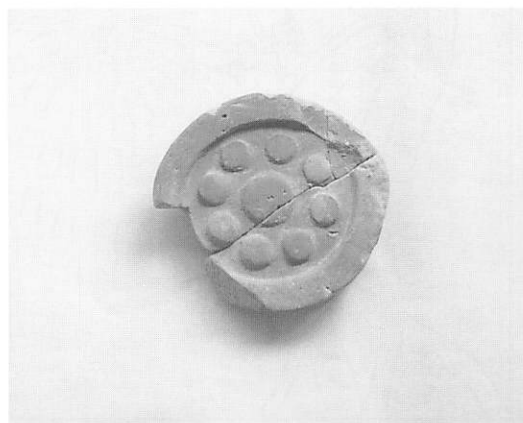
登城口推定地Ⅱ（二尊寺周辺）からは陶磁器片（染付）・土師器片が見つかった。またこれらに混ざって、砥石・るつぽが1つずつ出土した。



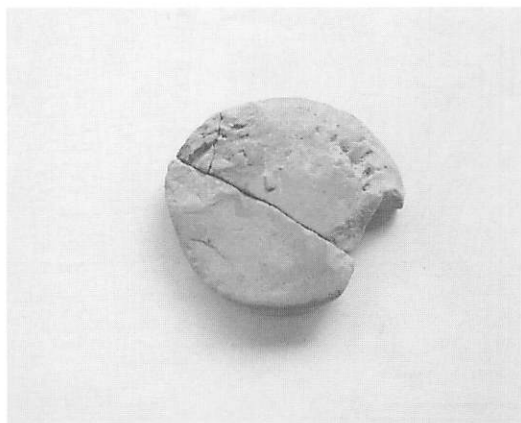
南西部堀切出土
軒平



南西部堀切出土
コビキ A・B



社教センター裏出土
細川九曜紋入 軒丸瓦（表）



社教センター裏出土
細川九曜紋入 軒丸瓦（裏）



社教センターうら出土
三巴入 軒丸瓦



二尊寺横トレンチ出土
瓦質土器



二尊寺横トレンチ出土
染付磁器（おもて）



二尊寺横トレンチ出土
染付磁器（うら）



二尊寺横トレンチ出土
るつぼ



二尊寺横トレンチ出土
砥石の一部

4. ま と め

今年度は城域の南の境界と登城口の確定を主眼とした調査であった。昭和55年の城山の公園化や社教センター建設工事などにより改変を受けていたが、一応の成果を挙げることができた。明らかになった点を列記してまとめとしたい。

南西部堀切推定地では断面U字型の堀が検出され、連続した丘陵の尾根部を切り、城山を独立させていたことが確認された。

登城口推定地の調査では、登城口と確定できる遺構は検出されなかった。二尊寺横のトレンチから東西に走る石垣が出土した。この石垣は自然石や粗割りした石も用いられており、築城と同時に築かれたものと考えられる。

石垣の南側は堀のように思われる。明和9年の『芦北郡佐敷之図』に、この位置には堀は描かれていない。破城行為の一端を示すものであろうか。来年度の調査で明らかにしたい。

社教センター裏側からは岩盤を削った溝跡が出土し、溝跡に沿って柵列のような柱穴も確認された。明治8年の作成と考えられる地籍図にこの位置に溝が表現されている。発掘された溝は築城した時期まで遡る可能性もある。

上記の地籍図には二尊寺付近から城山に登る道が表現されている。この道は破城の後、山王社のために作られたのであろう。

おもな参考文献

八代市教育委員会

『薬師堂跡・うその谷窯跡』（八代市文化財調査報告書第8集）1996年
熊本県教育委員会

『松岡屋敷跡・平山瓦窯跡』（熊本県文化財調査報告第150集）1995年
磯永和貴 『佐敷町の歴史地理学的研究－城下町から在町への推移を中心に－』
（熊本地理第6巻）1995年

佐敷小学校百周年記念事業期成会

『佐敷小の百年』（創立百周年記念誌）1976年
下田一喜(著)/仲新・石川松太郎(編)

『稿本 肥後文教史』（日本教育史文献集成 第一部 地方教育史の部4）1923年/1981年

5. 調査体制

調査地区	熊本県葦北郡芦北町大字佐敷字下町		
調査面積	604㎡		
調査期間	平成9年7月～平成10年3月		
調査主体	熊本県芦北町教育委員会		
調査団長	芦北町教育長	大石正雄	
調査副団長	芦北町社会教育課長	米良信一	
調査主任	八代工業高等専門学校教授	佐藤伸二	
調査担当者	社会教育課 主事補	深川裕二	
調査指導	玉名歴史博物館館長	田邊哲夫	
	熊本大学工学部教授	北野隆	
	熊本大学文学部教授	松本寿三郎	
	熊本史学会 会長	花岡興輝	
	元熊本市文化財保護委員	鈴木喬	
	熊本県教育庁文化課		
	芦北町文化財保護委員	山下勉・吉津隆勝	
		山本定信・平嶋初義	
		畑中秀夫	
総務	社会教育課係長 白菊静子	主事 長崎十三男	
発掘調査補助員及び協力者			
	鎌木二男・坂梨軍喜・渡辺初義・上村改造		
	平川正美・松本みどり（別府大学学生）		
	田中美和（大手前女子大学学生）		
整理作業員	川口トエ子・中村チエ子・川添桂子		
	野田千代子		

その他、多くの方々にご指導、ご助言、ご協力を賜りました。改めて感謝致します。

6. あ と が き

城跡の整備も一つの区切りを迎え、県の指定も受けた。新聞やテレビの報道で、佐敷城の名は広く知れわたった。今後、芦北町を訪れる方の数は確実に増加することであろう。その方々を町としてどのように受け入れていくか、各部署で知恵を出しあっておられることと思う。

文化財調査の側から言えば、城跡とその城下町である本町筋とを一体として理解できるように努力すべきだと思う。今年度に行った社教センター南側の発掘調査は、そのための第一歩と位置づけている。一般の人々の目を引くような成果はあがらなかったが、今後につながる確実な遺構をとらえることができた。

今までの成果を踏まえながら、来年度も地道な調査が進められることと思う。二の丸部分の未発掘部分も重要であるし、出土品の整理作業も急がれる。これらを着実に進めながら、調査の主眼はそろそろ城跡と本町筋との間に移すべきだと思う。

昨年から、天下泰平瓦を染めぬいた暖簾が本町筋の店先に見えるようになった。町民の方々が色々な形で、発掘成果を生かす工夫をされている様子がわかる。歴史を生かし、多くの人々に楽しんでもらえる活気のある町となる日も近いようである。

調査主任 佐 藤 伸 二

番代屋敷跡南側・南西部堀切発掘調査概報
平成10年3月

編集・発行 芦北町教育委員会
〒869-5461
熊本県葦北郡芦北町芦北2015
電 話 0966-82-2511
印 刷 秀文社印刷

*肥後国絵図については、無許可複製を禁ずる。

This is a traditional Chinese landscape painting, likely a reproduction of a historical work. The scene depicts a winding river or path that flows from the upper left towards the lower right. The banks are rendered with soft, yellowish-green washes, suggesting grassy or sandy terrain. In the background, there are stylized, misty mountains in shades of grey and blue. A prominent feature of the painting is the dense, flowing red Chinese calligraphy that is superimposed over the central and right portions of the landscape. The characters are written in a cursive, expressive style. At the top of the painting, there are two circular red stamps containing characters, which are likely collector's or artist's seals. The overall composition and style are characteristic of traditional Chinese ink and wash painting, with the addition of the red calligraphy providing a modern or historical commentary.

明正典刑

天保十三年

विष्णुः